

『匠家故実録』に見る建築儀礼

村田 あが

はじめに

江戸時代の住まいをめぐる研究の一環として、主に江戸時代中、後期の家相文献を読み解く作業が続いているが⁽¹⁾、本稿では、当時の代表的な家相文献の著者が記した建築儀礼に関する文献である「匠家故実録」を見ることにより、家相文献との関連性や家相説の流行について側面から考察し、その全容を明らかにする一助とするとともに、江戸時代の住まいづくりの一端を解明したい。

本稿で取り上げる「匠家故実録」は、棟上げをはじめとする建築儀礼についての文献であり、家相文献の著者、すなわち家相相者がこれを記したという点からは、家相相者の建築儀礼への関わり方を読みとることができる。一方、当時の普請にまつわる祭事や建築儀礼そのものを知るためにも資するとはいうまでもない。

一、家相説について

本論にはいる前に、家相説とは何かについて記しておきたい。筆者は主に江戸時代中、後期の家相説について調べているが、家相が非科学的な迷信であると知りながらも、家を建てる際に家相にこだわる例は現在もおおく見られる⁽²⁾。建築という極めて物理的な行為に、迷信のような精神的な問題を絡めて考えるということが、特に住居の建設に際して行われ続けているということは、人々が、住まいというものに、「単に人が暮らす器である」という以上の意味づけをしていることを示している。

迷信と知りながらも、そこで暮らす人間の吉凶禍福を左右するといわれればそれに従う人が多いことは、人の住まいの精神的な意味性を物語っており、しかもそこに特定の方位に関する禁忌の概念が絡むことが、筆者には大変興味深く思える。

江戸時代の家相説は、住まいづくりの際の方位に関する禁忌であ

る点は現代と変わらないが、江戸時代の中、後期の家相文献からは、敷地の選定方法から間取り、庭造りに至るまでの家造りの一切に関して、方位別に吉凶を説きながらも全体としては、日照、通風に配慮する、ごく一般的であり常識的な住まいづくりの基本を、禁忌という戒めを介しながら庶民に教えるという姿勢が読み取れる。

しかしこれが江戸時代末期になると、方位別吉凶判断の内容に荒唐無稽なものが目立つようになり、その点が助長された形で明治、大正期に受け継がれ、現代に続くものと考えられる。

二、著者松浦東鶏について

松浦東鶏が享和三年に自序を記した『匠家故実録』は、上中下の三巻に分かれた書であり、筆者が底本として用いたものは、文化五年発行の版本⁽³⁾である。

著者の松浦東鶏は、本書では自序の署名に「斑鳩 松浦長門椽橋久信」、本文の冒頭の署名に「浪華 松浦久信著述」とあるように、広く関西で活躍した家相相者であり、名を久信という。長門椽、橋とも名乗り、東鶏は号である。『国書人名辞典』には、「文政の頃大阪の瓦屋橋の東に住し、地理風水方位などの諸学に精通し、占易の名家と称せられた」とある。また、明治時代に編纂された家相文献である『家相新編』⁽⁴⁾は、江戸時代の中、後期の家相流派について詳しいが、これによると松浦東鶏は松浦派という家相の一流派の始祖であり、後に彼の甥である松浦琴鶴がこの流派を継ぐことになる。

東鶏は本書を含めて、判明しているだけで十種類の書を出している⁽⁵⁾。刊年などの判明しているものから順にあげると次のようになる。

『家相図解』寛政十年（一七九八）刊行

『家相図説大全』享和元年（一八〇一）刊行

『方鑑精義大成』享和二年（一八〇二）序文

『匠家故実録』享和三年（一八〇三）自序

『方鑑的要全書』文化三年（一八〇六）⁽⁶⁾

『方鑑三白弁義』文化六年（一八〇九）⁽⁷⁾

『風水玄機録』文化七年（一八一〇）⁽⁸⁾

『斑鳩夜話問答集』文政元年（一八一八）刊行⁽⁹⁾

『家相験録』（刊年など不明）

『家相秘伝四神書』（刊年など不明）

『匠家故実録』に先行する『家相図説大全』も、本書と同様に、京都、大阪、奈良だけではなく、江戸においても、当時絵図と武鑑で売った大書肆である須原屋茂兵衛で刊行している⁽¹⁰⁾。出版部数に関して是不明であるが、本書の自序に「書肆のもとめに応じて」これを刊行するとあるのをみると、当時すでに家相文献の著者として名の通っていた著者に、書肆が売れることを見越して建築儀礼の書を刊行することを促したとも推測できよう。

書名の角書きには「棟上新始」、「諸式礼格」とある。また、表紙に「この書は番匠の故実、地祭、新始め、柱立、棟上等の諸式を、

画図に顕わし、匠家の常に心得べき的要を悉く記せし本なり」とあるように、本書は、番匠、匠家のためのもの、つまり大工（本文中では、工匠と書いていただくとふりがなをふる場合もある）のための書であると位置づけられているが、実際には、式礼を執り行う大工棟梁に向けて書かれている部分や、普請を行う施主に向けた部分も見られる。

三、「匠家故実録」の構成と概要

全体が上中下の三巻からなることは先述の通りであるが、ここでは煩雑さを省みず目次を載せ、そこから本書の構成を読みとることにする⁽¹⁾。

匠家故実録巻の上目次

発端

○地鎮祭（じちんさい・じまつり）の大意

○地曳（ちびき）の式礼

右本式中略式略々式調格作法

○龍伏（いしずえ）の式礼

右本式中略式略々式調格作法並びに八神石の事柱礎（いしずえ）の次第

○初斬（ておのはじめ）の式礼

右本式の次第並びに神供陽形餅（おがたまち）陰形餅（めが

たまち）海広物狭物島広物狭物奥津藻菜辺津

藻菜甘菜辛菜等種々供物の事

新打の次第並びに満座祝酒の式

右中略式略々式調格作法

巻の中目次

○清匏（きよがんな）の式礼

右本式中略式略々式調格作法並びに匏削（かんなかけ）の次第

第

○立柱（はしらだて）の式礼

右本式並びに立柱の次第同中略式略々式調格作法

○上棟（むねあげ）の式礼

右本式の次第並びに神供九曜餅月形餅等種々供物の事

玉女櫛（ぎよくによだな）の設格

木綿綱（ゆうづな）木綿綱柱の事

破魔弓破魔矢の作格

扇子（おうぎ）車の事

棟植（むなづち）の事

棟植打の次第丁寧の式略式等

右上棟中略式略々式調格作法

巻の下目次

○棟札の事

○家堅（やがため）祭の大意

○諸式礼祭神勸請同神送（かみおくり）の事

○広前着座退座等の事

○盤座（はんざ）居敷（ひざつき）の事

○御食棚（みけだな）造格並びに寺院造建の節の供物の事

○神供物祝詞（のつと）

社頭寺院武館町屋等造管祝詞の心得

○神璽幣（みしるしべい）同略幣五行幣青幣（あおにぎて）白幣
各裁様（きりよう）

祓木綿（はらいゆう）注連木綿（しめゆう）陰陽形木綿（ひ

おがたゆう）各裁様

麻袋（ぬさぶくろ）の事

切麻（きりぬさ）散米の事

○幣串（へいぐし）幣台（へいだい）高案（たかづくえ）祓案
（はらいづくえ）等の事

○諸式礼祭壇設格の心得並びに祭礼服の事

○工匠（だいく）祖神並びに諸式礼祭神霊徳の大意

以上

匠家故実録目次畢

本書では、このように主に住まいの普請に際する建築儀礼について、順を追ってその方法と格式別の作法を述べている。本文中には図版も多く、祭壇や供物の整え方が格式別に図示されている。

上、中巻には、地鎮祭、地曳き、龍伏（いしずえ）、手新初め、清匏、柱立て、上棟の主な儀礼について、それぞれの儀礼別に、祭神、供物、式礼方法、祝詞、それらの略式方法が述べられ、祭壇の整え方とその図解が示されている。下巻では、各儀礼に用いる礼服や棟札、幣紙や、その祭り方などが述べられている。

全体を通して、建築儀礼の理念について記すというよりは、実際の儀礼の進め方と作法について時系列に沿って述べている点が特徴である。たとえば、「ここで匠の長は一休みし、休憩をとる」と本文にあるように、儀式の進行について具体的な指摘があり、儀式を行う建築工匠や普請の施主に対する教則本として本書があることが明らかである。次に、具体的に内容を見てゆく。

四、建築儀礼とその格式別の作法

本文では、冒頭の自序に当たる「匠家故実録書譜」で建築儀礼の必要性と著者との関わりについて述べている。すなわち、「工匠の祖」は斑鳩の里を往古に開いた聖徳太子であり、「宮社仏閣室殿宅屋を建て営むの法」を作り、後世に残したという。その後もこの方は受け継がれたが、近年「時移り世変わりてその道その法混雑して見えたる事、諸国に多」く見えるが、著者は幸いに「神祇の職を勤め、また曆術家相法等の職を兼ねる」ので、聖徳太子の伝に詳しい、そこで書肆の求めに応じてこの一冊を編むという。

松浦派の家相文献では、日本における家相説ならびに建築の普請

に関わる決まり事などのルーツを、聖徳太子に求めるものが他にも見られるが⁽¹²⁾、家相に見られるような方位に関する吉凶を含む相地、選地法としての易占術が、曆本、天文地理の書などとともに易経の一部として我が国に導入されたのは、仏教伝来とほぼ同時期とされており⁽¹³⁾、聖徳太子を祖とする説は、これと関係あるものと考えられる。

「地鎮祭」は、現在でも建築工事の最初に執り行われる建築儀礼であるが、ここでは「地は万物を載せ保つ」重要なものであるから、敷地を設ける際、先ず「大土祖神、埴山彦神、埴山媛神（おおつちみおやのかみ、はにやまひこのかみ、はにやまひめのかみ）」をはじめとした「地鎮応護の神」を祭るといふ。また、宅地の四方を祭り、清めた土を敷いた上、凶土を吉土に変える祭りをする場合についての記述もある。土地の神を鎮め、そこに建築行為を行うことの許しを請うという意味では、現代にも通じる儀礼である。

「地曳の式礼」は、地鎮祭後の吉日を選び、建物の外形に沿って竹を立て、細縄を張ってその中心に祭壇を設け、中央と四神を祭る建築儀礼である。四神とは、青龍、白虎、朱雀、玄武と呼ぶ、古代中国以来、東西南北の四方を守護するとされる伝説上の神獣をいう。式礼では、中央と四方に五行幣を立てるが、これらは「青帝龍神」、「赤帝龍神」、「白帝龍神」、「黒帝龍神」、「黄帝龍神」の五神を祭る

ものである。四神と中央を象徴する色である青、赤、白、黒、黄の五色の名を付けられた龍神を勧請し、これから建つ建物の四方と中央を守るよう祈るといふことを意味している。

家相説においても、四方と中央は方位別の吉凶判断において必ず問題とされる場所であり、普請のはじめの段階で祭ることを良しとすることも理解できる。

本文には、祭壇の設け方（図1）から儀式次第、中臣祓いや六根清浄を唱えること、さらに神供祝詞のあとに地曳祝詞を唱えるなどと、微細にわたり式礼の手順に関する記述がある。地曳祝詞に関しては、祝詞の全文が記載されている。「謹み謹み惶（おそ）れみ惶れみ申す」で始まり、「工匠何某謹んで申す」で終わるが、その敷地に、何の目的で建物を建てるのかも祝詞に盛り込み、その地の鎮守を祭神に祈り、以後の造営の成就を祈願し、幾久しく守護してもらうことを願う文面となっている。

このあとには略式（図2）、略々式の作法が図とともに示されている。略々式は、その地面の中程一カ所に清土を盛り、四方に略幣を立て、前に荒薦を敷き、神酒干魚を供えたとあるが、これは現在、都市の町なかで行われる形そのものである。

最後に、清土を取り寄せる際の方位についての記述がある。「正月丁方丙方」とあるように、正月の普請ならば、敷地から見て丁（南南西）、丙（南南東）の方角から清浄な土を取り寄せよという。また、市中の場合は、その方位に当たる「土商人（つちあきんど）」

から、四十五日を経る土を求めてもよいというくだりがあり、土商人という職種の存在と、一定期間おいた土ならばよいという解釈が示されおり、興味深い。また、四季の土用中はもちろん、毎月の十日、二十日、三十日の塞日（ふさがりび）を除けて土を動かすようにと説いている。

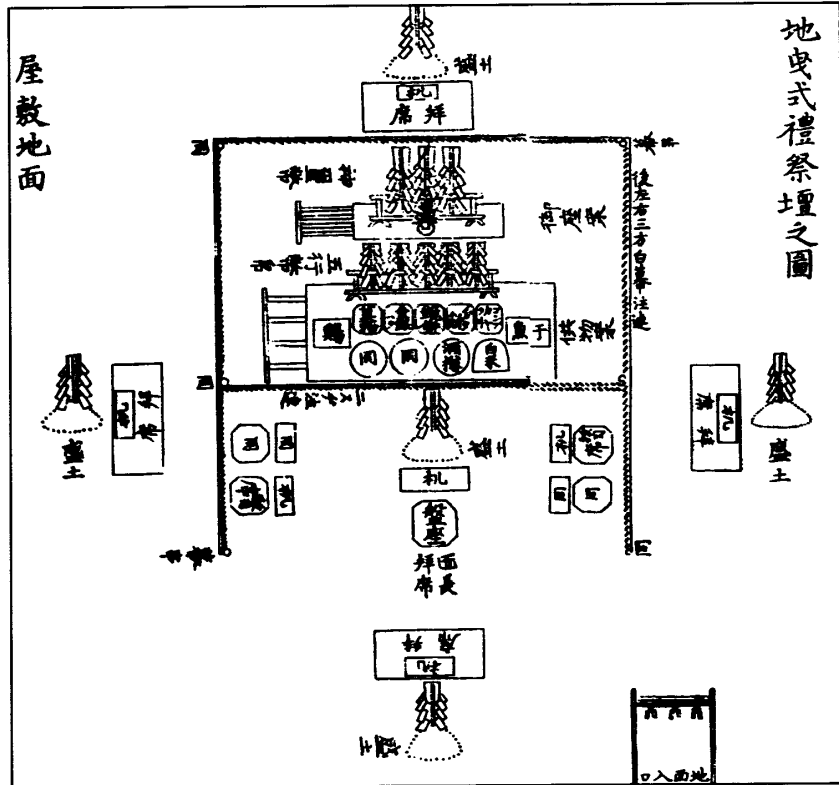


図1 地曳式礼祭壇の図
図版は全て東京家政学院大学図書館大江文庫所蔵の版本による。

地曳略祭壇之圖

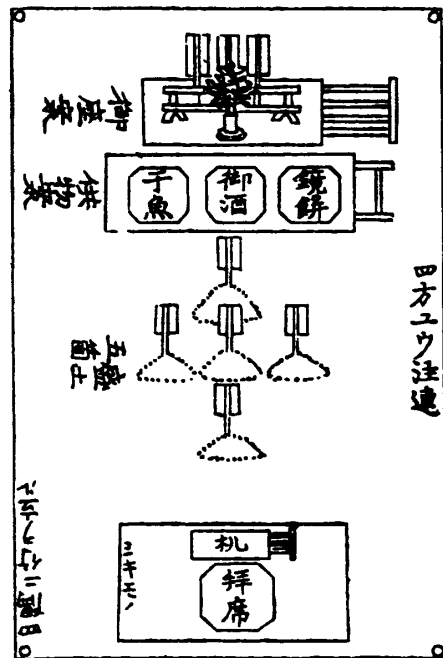


図2 地曳略祭壇の図

「龍伏（いしずえ）の式礼」とは、建築物の基礎を作る作業、すなわち柱の下の基礎石を据えることに関する建築儀礼であり、現在でもビルなどの出入口近くに、「定礎〇〇年〇月」とあるように、その建物の基礎をいつ据えたのかということ、建築行為上重視される点である。土台を固めるという意味もあり、現代ではそれに際して「定礎式」が執り行われる場合もある。

この時代におけるそれは、「龍伏」と書いて「いしずえ」と読ませているとおり、荒ぶる龍を伏せて、その土地に建築行為を行うこととの許しを祭神に請うための儀式である。本文には、「地礎（いしずえ）の次第は、先ずその月の生氣（しょうき）の方より初めて、柱石を礎（す）え、それより順に右旋（めぐ）りに礎えゆくべし」とある。

「その月の生氣の方」とは、この項の最後に「毎月生氣の所在」

が載せられており、例えば「正月北の方」とあるように、正月の定礎なら、建築物の北から基礎石を据える作業を始めることをいう。このように、月別に作業を始めるべき方位を定め、「生氣」の所在を確認しながら基礎を作ることが示されている。

中国伝来の風水思想では、地面に「氣」が流れており、その流れをスムーズに運ぶことを良しとしているが、「氣の流れ」は、山脈の重なる様を模して「龍脈」とも呼ばれる⁽¹⁴⁾。江戸時代の家相文献にも、「風水」や「氣」という言葉は多用されており⁽¹⁵⁾、地面に造作を施すことはその龍脈を損なうことにもつながるため、「龍」を「伏せる」、つまり鎮める必要があると解釈されたと考えられる。

作業としては、先の「地曳き」で縄張りした建物の外形に沿って、主要な柱の基礎石を「生氣の方」を初めとして順繰りに据えることが中心となるが、この他にも、敷地の八方位（東西南北と乾坤艮巽、すなわち北西、南西、北東、南東）の隅に祭壇を設け、その各々に石を据えて「八神石（はちじんせき）」とし、これを奉ることもする。

八方位のうち、春なら東、夏なら南…と、定礎の時節により方位は異なるが、その方位の「拜前（供物棚）」を立派にしつらえ供物を供えるといい、供物の内容について詳しい指示もある。続いて祝詞の記述があるが、「柱礎（いしずえ）萬々歳、布地（しきつち）安全長久栄昌守護」を折り奉ることが目的であるという。

前項も同様であるが、建築儀礼の作法を伝えるのみならず、作法

にまつわる暦や方位に関する指摘が細かい点が、本書が家相相者の手により編まれていることの特徴である。

「新初の式礼」は、「新初（ておのはじめ）は所謂木造初めなり」とあるように、建築行為として木材に関わる最初の段階であるため、特に「木匠（こたくみ）」にとっては重要であり、「丁寧を尽くす」必要があり、儀礼を挙行する「匠長（たくみのおさ）」は、事前に厳重に別火潔斎して勤めるべきであると説いている。

供物には、目次で先に示したように聞き慣れないものが多く見られる。「陽形（おがた）餅、陰形（めがた）餅」とは、三つ重ねの餅のうちの一つが黄色であるものが陽形、これの小判型のもものが陰形であるという。「海⁽¹⁶⁾の広物、海の狭物」とは、大きな鯛と小さな鯛それぞれ一尾づつのことであり、「奥津藻菜辺津藻菜」とは、昆布二把と青海苔十二把のことをいう。「畠の広物、狭物」は小菜（菜物のうち、比較的小さな物を指すか）のことである。「甘菜、辛菜」は大根、蕪のそれぞれ葉付きのものをいう。以上をはじめとし、米や五穀、酒、干した魚などが供物として供えられる。本書では、儀礼の格式別に何をどれだけ揃えるのかを詳細に述べている。前日までに揃えるようにとの注意書きもあり、これらを供える台や器に関する決まりも記されている。

敷地内に祭壇を設ける点は前項までと同様であるが、ここでは「番匠道具」、すなわち大工道具も供物棚の隣に並べる点が異なる。

儀礼の中心をなす作法は、祭壇の前に材木一本を置き、これに曲尺を当て、墨壺を用いて墨糸を引き、初めての墨を打ち、その後用材に初めて鉾を入れることである。鉾を入れる回数、順序などに細かな決まりがあるが、この作法の間、祭壇の正面に鉾の刃を向けてはならないと戒めている。

「清匏の式礼」は「木造（こづくり）初めより以来、造工（つくり）成し置ける所の用木を改めて清め浄（きよ）むるの式礼」であるという。木造の建築物を造る際には、先ず用材に必要な長さに揃え、継ぎ手や仕口の部分を造作した後に、これらを立て込み、組み上げていく。この清匏の儀礼は、仕口などの造作が終わり、組み立て作業に入る前の用材を清めるといふものであり、祭壇の前には先の新初めの時と同様に、造作済みの主要な用材が並べられる。

母屋の棟が最も重要であるため、祭壇寄りに棟材を置き、順次他の棟材、棟受け柱、と並べられる。俗家（一般の住宅）の場合には、大黒柱も重視される。やはり木造工事の重要な部分を意味するため、俗家のみならず、「宮殿及び神社仏閣等造営の節は殊更に」重視される儀礼である。「匠長（たくみのおさ）、役を勤める輩」もともに、「謹んで別火潔斎してのぞむべき」であるという。

清匏祝詞を唱え終えたあと、用材に清匏をかける作法を行う。一つの材に対して、「両端と中央の三カ所に「水」の字に似た形に匏を入れるというが、この意味は特に記されていない。ただし、下巻の

棟札の項には、棟札の裏に「水」と書き記すが、これは「鎮火災（ひしづめ）を念じて書すべし」とある。清匏の際の「水」に似た形も、同様の意味を持つと推測できよう。

「立柱の式礼」は、いよいよ柱を立て込み、組み上げる作業に入る際に行われるものであり、四季に応じて柱を立て始める方角が決められている。春は南、北、東、西の順に立て、夏は北、南、西、東の順などある。もともと、儀礼当日より前の吉日を選んであらかじめ柱を立て込み、当日に季節に応じた立て始めの位置の柱の元に祭壇を設け、その柱から始めて、先の方位別の順に従い、柱にくさびを打ち込むことでも良しとされる。

祭神は「天星玉女神（てんせいぎよくによじん）」をはじめとした三柱の女神と、北斗七星を奉る七神である。三女神には「立柱（はしらだて）及び諸作事吉祥」を折り、七神には「立柱以後、造営成就永久保全安護」を祈願するが、これはこの儀礼に限らず、どの段階の儀礼においても、先ずその儀礼自体の安全を折り、次にその作業以降の造営工事全体の安全を祈願している。生身の人間が行う作業であり、危険が伴うことを常に考え、建築儀礼のたびごとに安全を祈るとともに、工匠自身もそれを確認していたことが知れる。

「上棟（むねあげ）の式礼」は、「造営成就の佳節にしてこれ第一の大礼式なり」と本文の冒頭にあるように、建築儀礼の中でも

つとも重要視されているものである。この点は現代においても同様であり、上棟を派手に執り行い、小屋組の上から餅をまき、工事関係者や近所に振る舞いをする例も見られる。

本文では、「殿造（とのづくり）神社仏閣或いは大家等」の棟上げに際しては、吉日に棟木を上げる造作を行い、次の吉日に日を改めて「上棟の神祭り及び植の式」を行うが、「小家造建」つまり一般的な住居の場合は、吉日の早朝に棟を上げ、同じ日に神祭り、植の式を行うという。また、祭壇は屋根の上（図3）と柱根（はしらもと）（図4）との両方に設ける。

先にも示された三女神は地面に祭られる。地面には、柱根の祭壇と、それとは別に玉女棚が祭られるが、玉女棚の向きは「天星玉女の所在」として月別に方位が決められている。例えば正月ならば乙（きのと）の方（東北東）である。棚に供える供物も多岐にわたるが、前日までに揃え、当日早朝に神供棚に並べよとある。

また、目次にもある「木綿綱（ゆうづな）」とは、白木綿で作った綱であり、上の端を屋上の棟木の中央の幣串の根本に結び、下の端を柱根神棚前の八角の小柱（木綿綱柱）に結びつけるという。

次いで「破魔弓、破魔矢の作りかた」が述べられている。現代では、破魔矢は初詣のおりに神社で求めるものとしておなじみであるが、ここでもその目的は同様であり、魔を射る道具として、弓矢を二組用いる。一組は節数を七箇所にした弓と流鏑矢（かぶらや）を屋根の上の神棚の右に、鏑を少し下げて丑寅の隅に向けて立て、も

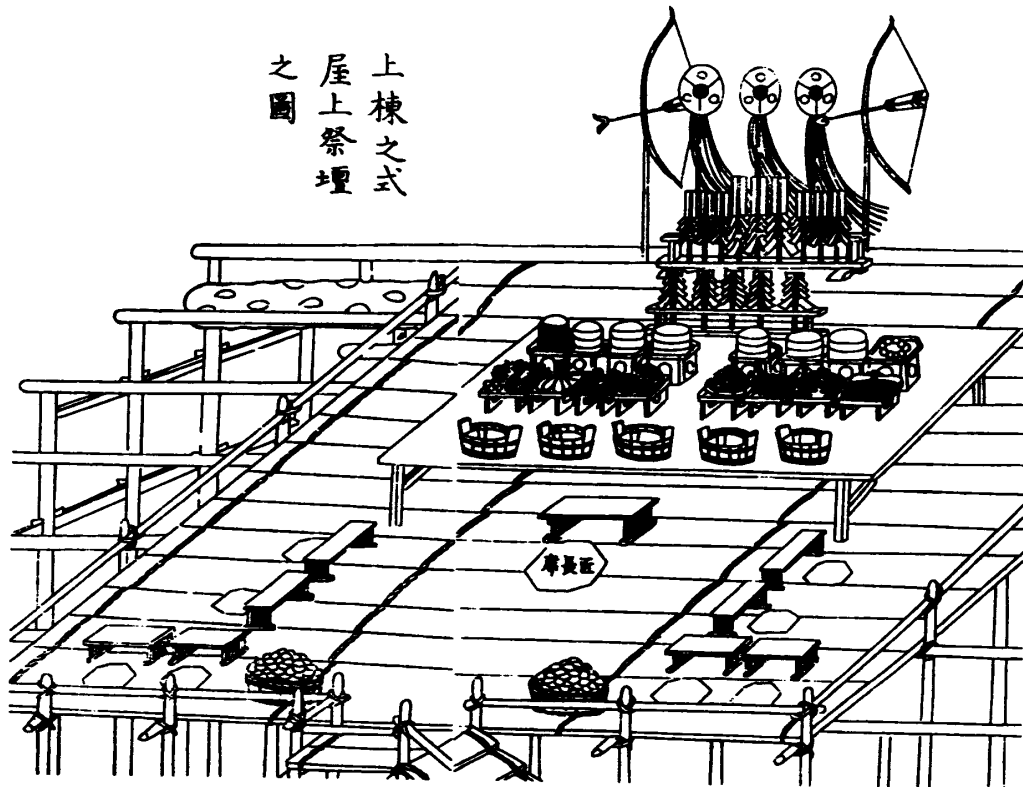


図3 上棟の式屋上祭壇の図

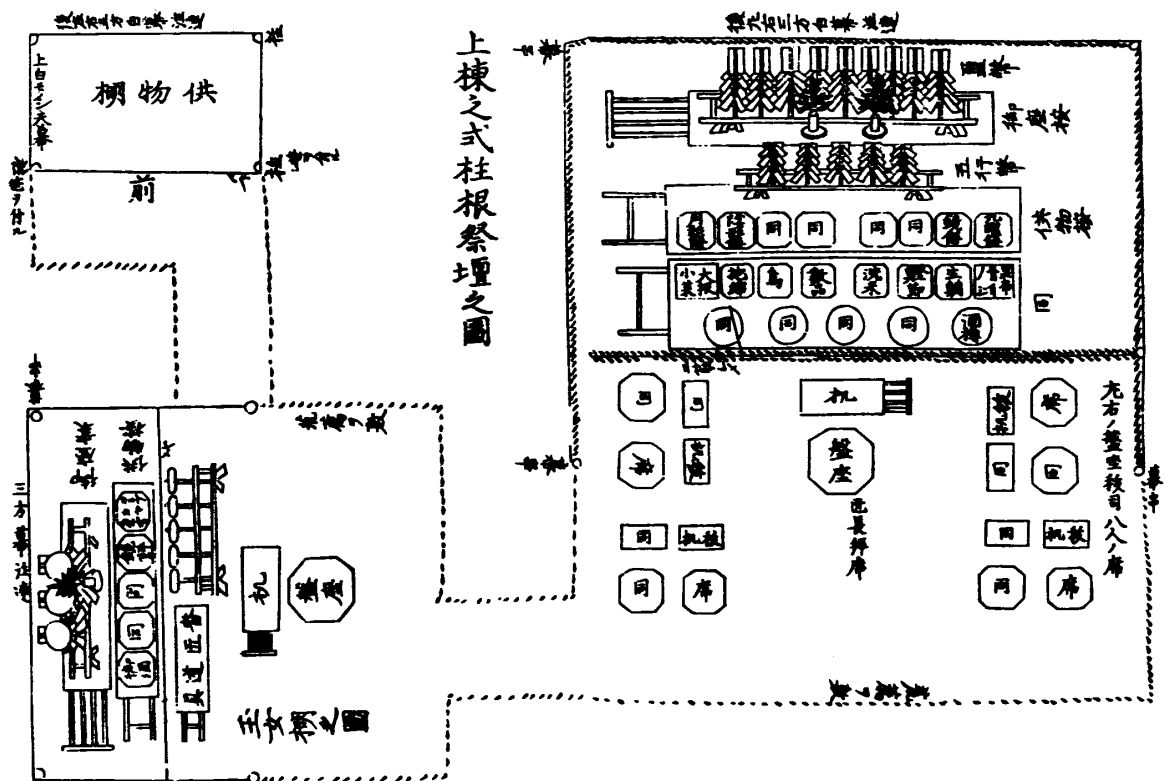


図4 上棟の式柱根祭壇の図

う一組は節数を八箇所についた弓と、雁股矢（かりまたや）⁽¹⁷⁾を左側に鍔を少し上げて未申の隅に向けて立てるといふ。

ここにはこれ以上の記述はなく、鬼門、裏鬼門に言及はないが、丑寅（北東）は鬼門と呼ばれ、忌み嫌われる方位としてつとに有名であり、この反対側である未申（南西）は裏鬼門といい、次に嫌われる方位である。家相の文献に見る方位別吉凶では、ほとんどの住まいの造作がこの二方位において嫌われている。玄関の位置、窓を開ける方位などはもちろん、廁の位置としても、最も嫌われる。そのような、住まいにおいて日常的に忌み嫌われる二方位を弓矢で射ることにより、邪気を治め、鎮めようという意図は明白である。

屋上にはさらに二組の破魔弓破魔矢の間に、扇子車（おうぎぐるま）を立てる。檜の串の先に、三面の扇を円を描くように要を中心につなげ、下に五色の絹を掛け、これを三本棟の上に立てる。風車と吹き流しに通じるものであり、やはり邪気を払う魔よけの意味が込められていると思われるが、本文には作り方以外の説明はない。

続いて棟槌（むなづち）の説明がある。これは屋上ではなく地面の玉女棚の前に飾られるが、槌の幅や持ち手の部分の長さなどが詳細に決められている。

以上で祭具の説明は終わり、次いで式礼の手順が述べられる。匠長（たくみのおさ）が儀礼を司るが、先ず最初に玉女棚の前に着座し、祓いを行い、次いで柱根（はしらもと）祭壇の前に座し、同様に祝詞をあげる。次に屋根に登り屋上の祭壇に着座し、式礼を執り行

う。なお、屋根上での「上棟祝詞」の始まる前には、普請主をはじめとする参拝者全員が三箇所の祭壇を順に拝すること、屋根上に上る前に匠長は必要ならば休息所であれば「息を休むる事」もあるなど、細かい指摘がみられる。

続く「上棟祝詞」では、三箇所の祭壇で祀る神に対して、「当日（このひの）棟上げ成就（なりととのい）並びに以後の作り事吉祥（さいわいおおく）、家屋（いえづくり）永久（ながくひさしく）安穩（やすくおだやかに）栄昌（さかえさかえしこと）」を祈禱している。

屋根から降りると、柱根祭壇前の木綿綱柱の元で「棟植の式」が行われる。木綿綱柱の元にいる匠長の合図に従い、足場の上で槌を手にした工匠たちが、棟木を打つ。「千歳楽、万歳楽」と呼び声を掛け、土金徳を加持するために「土金」とも唱えたとある。土金の徳とは、五行、すなわち木、火、土、金、水のうち土と金のことである。この両者の組み合わせは、五行相互の関係のうちの「土生金」、すなわち土から金が生じるといふプラスの概念を象徴するものであり、祭事にふさわしい。この式礼のあと、匠長を先頭に三箇所の祭壇を順に拝し、神送りをする。そして、屋上から式礼成就を祝って、供物のうちの祝儀の餅などを披露する。

最後に、すべての式礼には、匠長が別火潔斎する事はもちろんであるが、「有官無官の身分相応の礼服を着して行事を勤む」べきであり、式礼に携わる他の人も「沐浴浄服して勤むべし」と、神聖な

行事であることを重ねて述べている。

五、建築儀礼にまつわる諸事について

ここでは、本書の下巻で扱われる項目から、前項の補足となる部分を取り上げて考察する。目次で見た通り、下巻では主に式礼で用いられる祭具や祭壇について詳細に説明している。棟札、盤座居敷（拜席の敷物）、御食棚（みけだな）、幣紙、五行幣、略幣、祓木、注連、陰陽形、麻袋（ぬさぶくろ）、幣串、幣台、高案（たかづくえ）、祭壇などについては、図とともにその作り方が載っている。また、式礼の挙行作法の補足として、着座、退座の方法、供物を供える際の供物祝詞、礼服について触れている。

上記の説明文の中には、寸法の決め方について特筆すべき事項がみられる。棟札の長さや幣串の寸法の決定に、「吉寸」を用いよと重ねて述べられる。棟札の場合は、「檜板にて頭を駒形になし、上下を星尺（せいしやく）（魯般尺法）の吉寸に値（あわせ）て作るべし」とあり、幣串の長さに関しては、「幣串の長（たけ）は星尺の吉寸に合わせて作るべし」という。

さらに、工匠家（たくみのいえ）では、星尺（魯般尺、北斗尺、唐尺ともいう）で縦方向を計り、横は八卦尺を用いて計るといい、詳しくは「余が著述の家相大全」に詳しいとある。これは本書の二年前に刊行されている東鶏による「家相図説大全」のことであり、同書の下巻巻末に追加として「門戸尺法」という項が設けられている。

門戸の寸法を吉寸で作るための方法が述べられているが、ここで先の星尺、八卦尺が扱われている。どちらも曲尺を八等分し、一尺二寸の一単位ごとに「財、病、離、義、：」、或いは「諸願満足、起諸災難、子孫繁盛、寿命遠長、：」などの語を付し、吉祥を意味する語の記された寸法に納まるように高さや幅を作ろうというものである。このような寸法に関する吉凶は、江戸時代の家相文献には多く見られる項目であり、特に松浦派の文献では必ず触れられる点である。

また、「諸式礼神祇勸請神拝神送等の事」の項では、「神祇（かみがみ）勸請神拝（じんはい）神納（かみおくり）の式は、相伝の免許これ無くては、勤め行ふ事あたわず」とあり、神祇職の相伝を受けた者が式礼を司ることを示している。前項で式礼の作法を見た通り、式礼は全て匠長の先導により挙行される。つまり、匠長たる大工棟梁は、神職の資格も有することが望まれている。数種類の祝詞を使い分け、式礼の煩雑な作法に通曉し、神祇職も兼ね備え、なおかつ工匠を束ねる棟梁であるとする、匠長の常人ではない様子がかがわれるが、本書からはその人となりなどの具体像は結ばれない。

下巻には、「家堅祭の大意」という項がある。「家堅（やがため）の祭式」は、工匠の家の祭礼ではなく、その祭り方はもっぱら「弓法」によるものであるという。普請が成就したのち、「入宅移徒（にったくわたまし）」が行われる前に、宅内に祭壇を設けて行う儀

礼であり、神弓神矢を用いて宅地の邪気、陰悪を射祓い、「家宅長久住者安全」を祈る。「入宅移徒」について家相相者がその時期と方位を見るくだりは、家相文献にもみえるが、「家堅の祭式」は弓道の家の人が行う儀礼であるせいも、家相の文献にはみられないものである。

さらに、「土金守護」を祈って加持を行う、宅主の生まれ年の本命星の守護を祈る、敷地の氏神を拝する、鬼門鎮護を祈るなどの式礼もあるが、これらは全て「家作成就居住安護保全」のための祭礼であるとし、著者の言うところの建築儀礼には含めていない。

下巻の末尾には、各建築儀礼で祀るべき祭神が逐一あげられている。聖徳太子からイザナギノミコト、八大龍神から土金徳の神まで、いずれの神も、家宅の長久安全、無災害を祈禱するためここに勸請されている。神祇職しか執り行えないという建築儀礼でありながらも、このようにありとあらゆる神を勸請して住まいの安全を祈るという点に、八百万の神の存在が感じられる。

六、家相相者と建築儀礼

家相相者であり多くの家相文献を刊行し、家相の流派を立ち上げた松浦東鶏による建築儀礼の書は、以上のように祝詞の文言まで詳しく載せた具体的な教則本であることがわかった。

著者は自らを神道と暦、家相を専門とする者として紹介し、建築儀礼の書を書いている。普請の際に施主の求めに応じて家相を見、

図面に朱を入れるところまでは一般的な家相相者の仕事の範疇であるが、そのあとに続く普請の最中においても、地鎮祭、地曳きから始まり、上棟に至るまで、建築儀礼を指導するという立場で普請に参加し、さらに多くの場合、家移りの際にもまた家相相者として、その方位や日時の決定などに関わる。つまり、普請の全行程への自らの関与を可能にするための一助として、この建築儀礼書の刊行が位置づけられると解釈することもできる。

家相相者である著者は、普請一般に関するソフトの部分全てカバーしているといっても過言ではない。現代においても家を造ること、家を買うことはその人の人生における一大事であり、それだけに不安も大きい。その不安を除き、普請の安全を祈るといふ点を著者が一手に担おうとしていることが分かる。

しかし、その不安を取り除くために挙行される儀礼にかかる出費は、ただごとではない。江戸時代後期のこの時代に、一体どれだけの人が本書にあるような建築儀礼の全てを行って家造りをしたのかは本書からは明らかではないが、このような本が江戸、京都、大阪で同時に出版されている事情を鑑みても、多かれ少なかれ本書を参考に普請を行ったケースはあったと考えてよい。

家相相者以外には、建築工匠が多くの場合普請の全行程に関与しているの、節目節目の建築儀礼も一般的には彼らによって、彼らの手法で執り行われたと考えられる。家相相者の関与はむしろ稀かもしれない。その彼我の差は、今後検討する必要があるし⁽¹⁸⁾、家相

相者の関わった具体的な普請における儀礼の記述も確認したい。

本稿では、「匠家故実録」のみの記述をもとに建築儀礼について見てきたが、これは式礼を執り行う工匠のための教則本であると同時に、供物などを準備し式礼に参加する、施主の側のための本でもある。本書の通りに式礼を行うと、地鎮祭に始まり上棟式に至るまでに、計七回もの行事を執り行わなくてはならず、格式に応じて略式で済ませることがあるにせよ、相当額の出費は免れないであろうし、時間も割かれる。普請に携わる全ての工匠に酒飯の振る舞いをしたであろうことも鑑みると、これは普請の節目節目を利用した「祭り」であり、施主の側に見れば工匠をねぎらい、工匠はそのたびに骨休めをする、供物にあがった珍しい品々を神送りとともに下げ受け、皆で飲食をとにもする、そのような場であったとも推測できる。

建築行為は、極めて物理的な行為であるが、そこには常に人が介在し、特に当時の建築現場は全て人力により仕事が成されていた。危険な作業やつらい作業などがあることは想像に難くない。そのような苦勞を、施主側、工匠の側がともに分かち合う場として、都合七回もの建築儀礼が必要であり、そのたびごとに心を新たにし、工事の安全を祈り直す必要もあったと考えられる。

家相判断という行為も、人々の「何かあると心配だから」という気持ちベースとなって成り立つことを考えると、建築儀礼に煩雑さを要求し、「ここで神を鎮めておかないと何が起きて保証され

ない」とは言わないまでも、「祈禱しておいた方が後々のため」といえば、それに従わない人はむしろ少ないだろう。その辺りを心得た上での本書の刊行と見ることもできよう。

方位に関する記述、暦に関する記述もこれまで見たとおり散見されるが、むしろ全体を通して、普請の安全を願ひ、家宅の、ひいてはその一家の長久安全を祈るといふ姿勢が重視されている。この点は、松浦派の家相文献の目指すところと同一である⁽¹⁹⁾。

家相相者による建築儀礼の書という稀なケースを今回は見てきたが、宗教者としての家相相者の建築行為への具体的な関わりという視点で、今後も江戸時代の住まいをめぐる問題の中での検討を続けたい。

註

- (1) 筆者は、江戸時代の住まいをめぐる問題について、江戸時代の家相文献を中心に検討を続けている。拙著『江戸時代の家相説』（一九九七、雄山閣出版）にこれまでの成果をまとめている。
- (2) 財団法人日本住宅総合センターが一九九二年年に住宅の建築事業者に行った調査によると、「住宅の設計 施工を行う際に際し、家相に配慮するかどうか」という設問に対し、回答のうち九七、六％が、最初から、或いは施工の要望があれば配慮すると答えており、事業者側も家相は無視できない設計条件と位置づけていることが分かる。
- (3) 筆者が底本としたものは東京家政学院大学図書館大江文庫所収の版本であ

るが、同じく文化五年発行の版本は新潟大学佐野文庫蔵のものもある。

- (4) 尾島碩聞著、明治三十四年（一九〇一年）刊行。
- (5) 『国書総目録』を中心とした資料から一九九七年にまとめた年表による。（村田前掲書、一九九七）
- (6) この年に刊行されたのか序文が書かれたのかは不明である。
- (7) (6)に同じ。
- (8) (6)に同じ。
- (9) これは、国書総目録の分類によると、占卜の書である。
- (10) 『江戸時代の家相説』（村田、一九九七）
- (11) ここでは読みやすさを優先して、旧仮名遣い、旧漢字は新字体表記に改めている。（一）内はふりがなである。○印は本文のままである。
- (12) 例えば、『太子伝暦』、すなわち『上宮聖徳法王帝説』（七〜八世紀頃の最古の聖徳太子伝）は、僧観勅が貢ぎ物として持参した暦本や天文地理の書を、聖徳太子が臣下に学ばせたと述べる段で、「…書伝を学ばしめ賜う事、太子伝暦に見ゆ」と、『家相図説大全』にある。
- (13) 周辺諸国からの陰陽道の日本への導入時期については、『日本書紀』の記述より、継体天皇七年（五一三）頃とする場合が多い。（村山修一『日本陰陽道史話』大阪書籍、一九八七）
- (14) 何曉昕『風水探源』人文書院、一九九四。
- (15) (10)に同じ。
- (16) 目次には「海」、本文には「和田」とあるが、同義であり、海のことを指す。

- (17) 又状の鎌をつけた矢のこと。
- (18) 建築工匠の側の記述としては、例えば「愚子見記」(延宝八年(一六八〇)頃にまとめられたとされる江戸時代の建築全書と呼べるもの)があげられる。
- (19) 家相文献では、家運長久、「お家の安泰」が希求されている(村田前掲書、一九九七)。